

取材日：2019年12月20日



新たに『外来透析室』を開設し 増加する患者各々に最適な透析を。

Point of View

- ① 増加する患者のために『外来透析室』を新設。外来透析室内外の多職種がチームになって透析を受ける患者のサポートにあたる
- ② 総合病院ならではの充実した診療科との院内連携により、合併症などにも速やかに対応する
- ③ 地域の診療所との病診連携の推進によって、スムーズな透析導入と維持透析を行う

社会医療法人景岳会南大阪病院
内科副部長／外来透析室室長

川口 祐司先生

社会医療法人景岳会南大阪病院
内科部長／副院長

久米田 靖郎先生

社会医療法人景岳会南大阪病院
内科／外来透析室副室長

増本 晃治先生

医療法人恵仁会小野内科医院
院長

後藤 清先生

医療法人蘭畦会わだ内科整形外科
内科

和田 憲嗣先生

増え続ける患者に対応すべく 新たに『外来透析室』を開設

日本透析医学会によると、透析患者の数は1968年の調査開始以降、右肩上がりであり上昇を続け、2018年時点での患者数は、全国で約339,000人。このうち大阪府の患者数は約24,000人で、東京都に次いで多い^[1]。

増え続ける患者に対応すべく、大阪市住之江区の南大阪病院が2019年10月、以前からあった透析施設に加えて新設したのが『外来透析室』である。

同院内科副部長で、外来透析室室長を務める川口先生が、新設にいたった経緯を説明してくれた。「当院では2004年、関連診療所の南大阪クリニックに『透析センター』

を開設、以降、患者さんの増加に合わせて設備を拡張してきました。

ところが、患者さんの高齢化が進むとともに新規透析導入患者数の伸びは想定以上に著しくなり（【資料1、2】）、次第に新たな患者さんや他施設から紹介された患者さんを受け入れるのが難しくなる事態になりました。そこで透析センターとは別に、当院内に外来透析室を新設する

にいたったのです」（川口先生）

透析センターは、入院透析導入用ベッド7床、外来透析用ベッド40床を有し、1日に約100名の患者への対応が可能だが、外来透析室の開設によって同院の患者の受け入れ体制は大きく強化された。

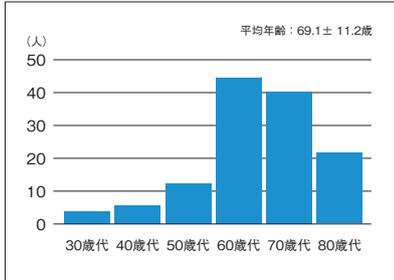
「外来透析室は30床で、1日約100名の患者さんを受け入れられます。透析センターと合わせた受け入れ可能



左から川口先生、久米田先生、増本先生、後藤先生、和田先生

【資料1】

南大阪クリニック透析センターの
維持透析患者の年齢



出典：川口先生提供資料

患者数は約200名と倍増し、地域のニーズに十分対応できるようになりました（【資料3】）」（川口先生）

外来透析室内外が多職種が
チームとなって患者をサポート

外来透析室の特色のひとつが、多職種によるチーム医療だ。

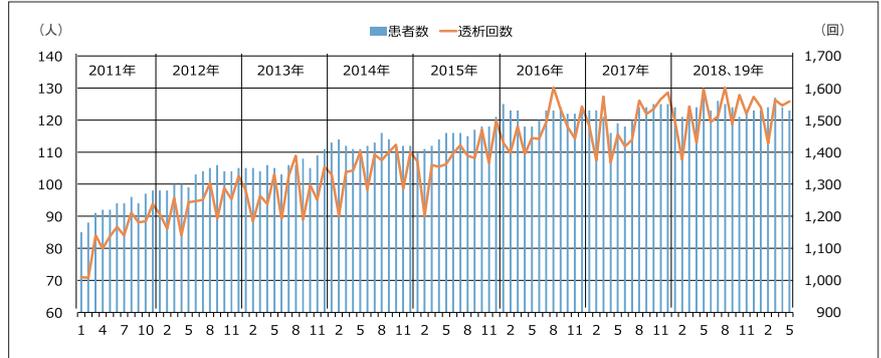
「外来透析室には、医師のほか、看護師4名、臨床工学技士2名、業務の補助者1名が所属しています。看護師も臨床工学技士も専任で知見が豊富ですから、患者さんの体により負担の少ない透析方法を我々医師に提案してくれるなど、非常に助かっています」（川口先生）

チーム医療を支えるのは、外来透析室のメディカルスタッフだけではない。

「たとえば、院内の薬剤師や管理栄養士もチームのメンバーです。薬剤師は、血液透析を行ううえで欠かせ

【資料2】

南大阪クリニック透析センターの患者数と月間透析回数



出典：川口先生提供資料

ない内服薬の調整を提案してくれま
すし、管理栄養士は、食事内容に不安
があったり水分摂取量が守れない
透析患者の相談に乗ってくれます」
（川口先生）

透析患者のケアにチームで取り組
むメリットについて、副院長の久米
田先生は次のように話す。

「透析患者は、慢性腎臓病（CKD）
や糖尿病、高血圧、脂質異常症とい
った基礎疾患を抱えていらっしゃい
ますが、安定した透析を行うには、
基礎疾患のコントロールがきわめて
重要です。このようなケアには、多
職種チームのきめ細かいサポートが
欠かせません」（久米田先生）

総合病院のリソースを
いかに活用した体制

南大阪病院は、診療科間の垣根が
低く、診療科同士の連携がさかんだという。
外来透析室も例外ではなく、他科との連携を
密接に行っている様子だ（【資料4】）。

「透析患者は骨が弱
なっているので、骨折
する方が少なくありま

せん。地域の診療所で透析を受けて
いた患者さんが骨折し、当院に紹介
されるケースも多くあります。そう
した際には、整形外科と連携し、透
析と骨折治療を並行して進めていき
ます。

また、がんを併発する透析患者も
多くいます。このような方々には、
がんの種類によって、外科、胸部外
科、呼吸器内科、消化器内科、泌尿
器科と連携しながら診療にあたります
し、狭心症や心筋梗塞を合併した
場合には、循環器内科の協力を得て
います」（川口先生）

このほかにも、糖尿病性網膜症を
診療する眼科、透析患者の合併症と
して多い、かゆみや湿疹に対応する
皮膚科など、同院には、透析患者に
何か起きたときに連携可能な診療科
がほぼそろっている。

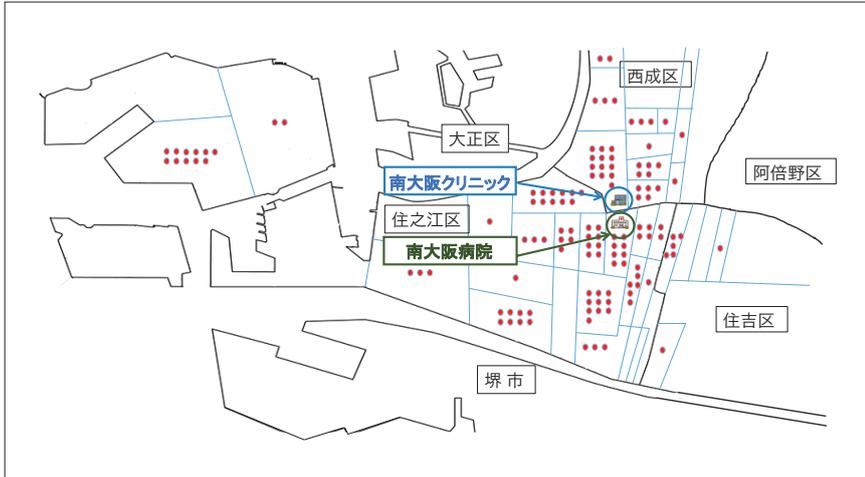
「加えて、検査体制も充実していま
す。放射線科や検査科があり、MRI
やCT、各種の血液検査ができます。
しかも、それらの検査は外来透析室
と同じ院内で行われるので、患者さ
んの移動の負担が少なくすみ、かつ
検査結果は、当日中に出ます。

患者さんに何が起きててもたいい
院内で解決できるのも、充実の検査
体制も、総合病院だからこそ実現で



【資料3】

外来透析患者居住地の分布



出典：川口先生提供資料

きることだと自負しています」(川口先生)

シャント外来がいつでも
緊急トラブルに対応する

そうした外来透析室と院内他科との連携の中でも、特筆すべきは『シャント外来』との連携だろう。

シャントとは、血液透析を行う際に、十分な血液量が確保できるように動脈と静脈を直接つなぎ合わせた血管で、主に患者の前腕部に造設する。血液透析には必須の存在だが、しばしばトラブルを起こし、患者のQOLを低下させてしまう。こうした事態に対応するために生まれたのがシャント外来だ。同外来を創設した外来透析室副室長の増本先生が振り返って話す。

「私が当院に赴任した2017年4月当時、当院も含めて地域にはシャント専門の外来がなく、緊急のシャントトラブル時には、循環器内科の先生方や遠方の医療機関に紹介せざるをえない状況でした。そこで、シャント治療を多く経験していた私は、週

2日のシャント外来を開設することにしたのです」(増本先生)

増本先生は、続けてシャント外来での診療内容を解説する。

「当外来では、新規シャント増設、シャント再建術、さらに、シャント狭窄や閉塞症例に対する経皮的血管形成術(PTA)治療を行っています(【資料5】)。

私は、透析専門医に加えて腎臓専門医でもあるので、当外来では腎臓専門医によるCKD管理と、透析専

門医によるシャントや透析の管理を一貫して行えるのが強みです」(増本先生)

「増本先生が着任されて以来、いつシャントトラブルが起きてもすぐに対応していただけるので、とても安心です」(川口先生)

ちなみに同外来では、PTA治療時に発生する疼痛の除去を重視しており、こうした点が患者に評価されたか、2017年度は月10件ほどだったPTA治療件数が、2019年度には月20件程度と倍増しているという。

病診の緊密な連携により
安全な透析導入が可能に

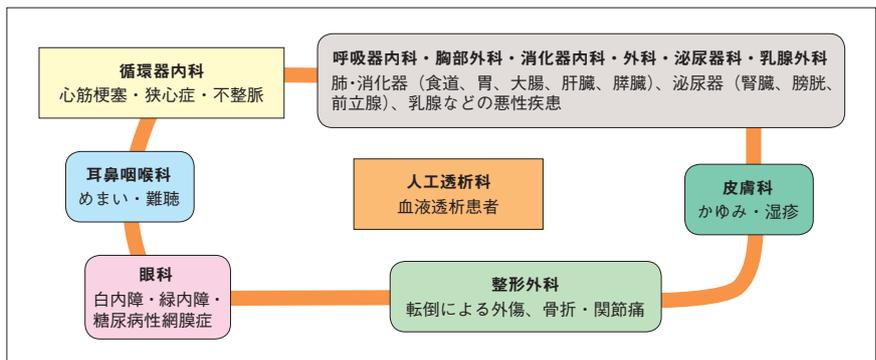
南大阪病院では、患者への透析導入や維持透析において、地域の診療所との間でも、患者の希望も考慮した柔軟な連携を展開している。

「診療所の先生方からは、eGFRがおおむね30mL/min/1.73m²未満になると、腎臓教育入院の依頼というかたちで患者さんをご紹介いただきます。

その後、透析導入が必要となればあらためてご紹介いただき、原則1～2週間の入院のうえ、計画導入を

【資料4】

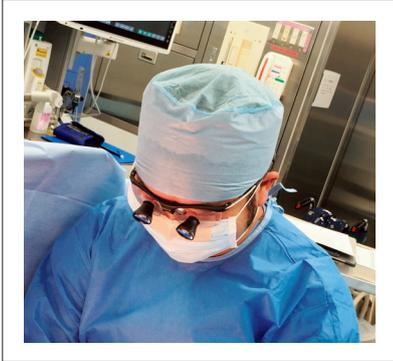
南大阪病院における院内連携



出典：川口先生提供資料

【資料5】

PTA治療の様子



出典：増本先生提供資料

行います。入院中に患者教育を実施して、退院後は通院透析となりますが、患者さんの希望によっては通院しやすい診療所を逆紹介するケースもあります」(川口先生)

ここで、同院と連携する地域の診療所の先生方の声を聞いてみよう。まずは、自院の外来においても血液透析を手がける小野内科医院院長の後藤先生。

「当院では、約80名の透析患者を診ており、入院透析が必要になったときやシャントトラブルが起きたときなどには、南大阪病院に相談をしています。

川口先生のお話にもあったように透析の患者さんが骨折したり、がんを併発した場合、南大阪病院がいつでもバックアップしてくれるので本当に心強いです」(後藤先生)

自院では透析を行っていない、わだ内科整形外科に勤務する糖尿病専門医の和田先生が言う。

「患者さんの透析導入が近づいてくると、あらかじめ南大阪病院に相談をし、できるだけ緊急透析導入を避けて、安全に透析導入できるようにしています」(和田先生)

診療所の先生方の発言を受け、川口先生と久米田先生は、さらなる病

診連携の拡大の構想を語る。「近隣の透析施設の先生方と勉強会や研究会を立ち上げて、これまで以上に連携を強化したいと考えています」(川口先生)

「診療所の先生方には、透析や透析以外の検査や治療はもちろん、リハビリ入院やレスパイト入院でも当院を活用していただきたい。そうすれば病診連携がより活発になり、絆が強くなるはずですよ」(久米田先生)

“第二の家庭”のような
外来透析室をめざして

地域における透析医療のこれからは、各先生方は、どんなビジョンを思い描いているのだろうか。

増本先生は、「そもそも透析導入予防が最重要課題」と切り出す。

「当院には、糖尿病専門医5名、腎臓専門医2名、糖尿病療養指導士9名、腎臓リハビリテーション指導士5名という、充実した医療体制があります。こうした専門性の高いマンパワーを生かし、まずは、院内で多職種のチームによる透析予防を今よりも活発化させ、さらには、地域全体にも広めていきたいです」(増本先生)

診療所の先生方はともに、地域で進行する高齢化に目を向ける。

「当院の患者さんも高齢化が著しく複数疾患を罹患する方が増えています。そこで、総合病院である南大阪病院との連携をもっと強化し、適切な検査や治療、入院によって患者さんのQOLを上げていくつもりです」(後藤先生)

「私も、患者さんの高齢化を強く感じており、将来的には、訪問診療による腹膜透析の管理や在宅血液透析の必要性が生じるのではないかと予想しています。もし南大阪病院から

そうした在宅患者に向けた透析治療のご相談をいただければ、ぜひ協力したいと思います」(和田先生)

久米田先生と川口先生は、これからの外来透析室のあり方を次のように展望する。

「外来透析室の開設により、患者さんを断らなければならない事態は解消されました。その点を近隣の診療所の先生方へアピールして外来透析室に患者さんを紹介していただき、そこを突破口にもっと多くの診療所と多面的な病診連携を構築したいですね」(久米田先生)

「透析患者は、在院時間が長く、ひょっとすると、ご家族とよりも、当院のスタッフと顔を合わせている時間のほうが長いかもしれません。ですから、たとえば患者さんから個人的な悩みごとにも相談していただける“第二の家庭”のような外来透析室をめざします」(川口先生)

新たに外来透析室を擁して、南大阪病院では、患者各々に対し、より最適な透析医療が提供されていくことだろう。

社会医療法人景岳会
南大阪病院

〒559-0012
大阪府大阪市住之江区東加賀屋1-18-18
TEL：06-6685-0221

医療法人恵仁会
小野内科医院

〒559-0001
大阪府大阪市住之江区粉浜1-24-19
TEL：06-6671-1939

医療法人蘭畦会
わだ内科整形外科

〒559-0001
大阪府大阪市住之江区粉浜2-3-17
TEL：06-6675-4008